

樋口一葉考

—比較文学的試論—

海老池俊治

雑誌「文学界」の最大の功績は女流作家樋口一葉を世に送り出したことだ——などというのは、乱暴なものもいいかたであろう。嫌味にさえ聞こえるかもしれない。しかし、明治文学史が誇るに足るこの偉大な創作家的才能は、もし「文学界」同人の友情に接しなかったとしたら、だいぶ違った形でしか開花しなかったのではあるまいか。

一葉を「文学界」に近づけたのは、三宅花園であった。一葉の日記『よもぎふにつ記』の明治二十五年十二月二十四日の条に、「來新年早々女學雜誌社より文學會といふ雜誌發兌に成らんとす。君に是非短編の小説かきて頂きたく、彼社より頼まれて此御願、云々」という花

園の葉書⁽¹⁾を、妹が一葉に渡したことが、喜ばしげに記してある。彼女は二十六日に花園を訪ねて、事情をただした。「和歌の一欄」を共同で担当すべき候補者として、一葉の名をあげたところ、

一葉女史の事はしもかねて女學生に論じたる如く、その妙想に感じ居れば、是非、小説の著作を依頼したく、其方様より依頼して給はれと星野君より手紙來たりぬ。

というわけなのだ、花園が語った。一葉は帰宅後すぐ机に向かったが、筆が進まなかった、と日記に記している。

とすれば、星野天知は、もともと、小説家一葉を認め

ていたのである。とにかく、「文学界」の創刊当初から、彼女を勘定に入れていたらしい。同誌の第一号に掲げた「發行緒言」の終わりに、「本誌の爲めに特に力を盡さんとせらるゝ諸君」として、

若松、花圃、一葉の諸名媛は袂を連ねて清婉優雅なる作に筆を染め、云々

と計画が述べてあるが、じっさい、一葉は、早々、第三号(明治二十六年三月)に短編小説『雪の日』を寄稿した。

その後も、一葉と「文学界」の密接な関係は引き続き保たれ、彼女の傑作であり代表作である『たけくらべ』は、明治二十八年一月から翌二十九年一月にかけて同誌に発表されたのである。もっとも、この小説が広く世間に迎えられたのは、じつは、四月の「文芸倶楽部」に再掲されてからのことであり、

われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ稱をおくることを惜まざるなり、云々

という『三人冗語』の有名な絶賛は、そのとき筆にされたのである。しかし、この作品を書かせて、はじめて

世に送った「文学界」とその同人の功績は、けっして低く見つめられるべきではあるまい。

ところで、「文学界」の同人は、北村透谷をはじめ、平田秃木、戸川秋骨、馬場孤蝶など、みな、英文学通であったから、彼らと交わった一葉は、なんらかの意味で、英文学に触れたに相違ない。彼女が受けた英文学の影響いかんという問題が、とうぜん、生じてくる。そして、それはいわゆる比較文学的立場から見ても、すこぶる興味深いとともに、かなり重大な意味を持つはずであろう。しかも——結果を先にいってしまえば、事実上、その実証が成立しないのである。が、その奇妙な逆説的考証の筋道をたどることは、あながち無意味ではないと思われる。ただに「比較文学」のみならず、文学研究一般の方法がかかえた問題点のひとつが指摘されるかもしれないからである。

一葉が「朝日新聞」の小説記者半井桃水の門弟になり、男としての彼を恋した経緯は、明治文学史の常識になっているが、彼女がはじめて桃水に会ったのは、日記『若葉かげ』によれば、明治二十四年四月十五日であっ

(3) 樋口一葉考

た。そのとき、桃水は、新聞の小説といはゞ、有ふれたる奸臣賊子の傳、或は奸婦いん女の事跡様の事をつゞらざれば、世にうれざるをいかにせん。我今著す幾多の小説、いつも我心に屑として、かきたるものはあらざるなり。

といったという。で、一葉が彼から売れる小説の作法を学ぼうとしたかぎり(じつさい、それが彼女の志望なのであったが)、小説家桃水は彼女の文学的精神の発展に資することが出来るわけがなかった。げんに、彼のすすめに従って書かれ、雑誌「武蔵野」第一編に掲載された『闇櫻』⁽³⁾について、その添削のしかたを考証した塩田良平氏の論考によっても、「半井桃水は樋口一葉に舊式な文学的構圖と修辭を與へた。一葉の本質に沿つてその構圖を展開させようとはしなかつた」ことは明らかである。⁽⁴⁾で、そのような彼女の小説に、天知がどれだけの価値を認めたにせよ、また、その「本質」が内在的にどうであったにせよ、「文学界」の雰囲気にはじめから彼女がつけこんでいたとは思われない。いや、むしろ、その雰囲気を醸し出したのは、同人たちとともに、彼女の働きでもあったに相違ないのである。先に名をあげた『雪の

日』にしても、いちおう、抒情的な感慨が美文で綴られたものにすぎず、今日われわれが知っている真の言語芸術家一葉らしい特色は、まだ發揮されていないといわなければならぬ。

ただ、興味深いことに、この小説は彼女と桃水との個人的な交渉の体験に基づいているらしい。一葉の『日記一』によれば、明治二十五年二月四日、彼女は雪をおかして桃水を訪ねた。眠っていた彼が起き上がって、雑誌発行の話をはじめ、寄稿を求めた。じつは、そうした経緯で書かれた一葉の小説が、右に名をあげた『闇櫻』なのである。そのとき、桃水は彼女のためにわざわざ汁粉を造って饗応し、泊って行けとすすめたという。その事情を逐一書きとめたあとに、一葉は、

雪の日といふ小説一編あまばやの腹稿なる。家に歸りしは五時、母君妹とのものがたり多けれどかゝず。

と、この日の日記を書き終わっている。いかにも小説的な叙述であり、多くの文学史家がそれに注目したのも当然であろう。しかし、小説家一葉の現実生活をその仮作と混同することは愚かな話である。いわんや、期せずしておのれを美化したかもしれない女一葉の美文に、目

をくらまされてはなるまい。とにかく、そのころまでに表われた業績にかんするかぎり、一葉は旧来のきれいごと、すなわち、与えられた古い倫理の枠内に終始して、近代的自我の反省を真剣な課題として取り上げたとはいえない。

藤井公明氏の「一葉小説の文章」⁽⁵⁾によれば、彼女の文章には「和文の教養が長く尾を引」き、「當時の小説家の中にはこれ程源氏物語や古今集の教養を骨の髄まで身につけていた人はあまり見當らない」が、『たけくらべ』のあたりから、「この過剰とも言うべき平安文學趣味から脱皮」している。「多くの俚諺成語を含む」む文体を駆使することができるようになったからである。とは、彼女の現実感覚がそれにふさわしい表現を模索し当てたということであろう。

が、そのような一葉の小説的表現の、したがって、また内容の習練は、もちろん、英文学から受けた影響であったなどといえない。それが実証されないかぎり……

しかし、「文学界」とその同人に接することによって、不可避に、一葉はヨーロッパの、ことに、イギリスの文

学に近づいたはずなのである。小説に限っていえば、たとえば、『雪の日』が掲載された同誌第三号に、棲月(秋骨)の「英國騷壇の女傑ジョージ・イリオット」といふ論文が載っている。『雪の日』の直前におかれているのであるから、一葉がそれを読んだことは疑いの余地がない。はじめに、「いで佛人シエーレル氏に就いて其の語る處を聴かん」とあるが、シエーレルのエリオット論は『ケンブリッジ英文学書誌』にも名のあがっている重要な初期エリオット研究の文献のひとつである。矢野峰人氏によれば、秋骨はその英訳をもとにしてこの論文を書いたのだという⁽⁷⁾。いづれにしても、この論文は、要をえた、ただし、今日から見れば、時代的偏見を素直に呑みこんだ、小説家ジョージ・エリオットの紹介である。

ところで、この紹介がどれだけ新日本文学一般の生成に資することができたかもさることながら、一葉はそれからどれだけ切実な感銘を受けたであろうか。

人或はイリオットを以てシエキスピアに比す、夫れ或は誇大ならん、然れども彼れを以てゲーテの死後尤も思想の高大なる人なりきと言はゞ適當ならんか。

というその結語の直後に、

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶の羽そで軽く……

とはじまる『雪の日』の美文が並んでいる事実は、奇妙なアイロニーのようにさえ見える。前述したように、『雪の日』が桃水との交情に裏打ちされているとしたら、なおさらのことであろう。一葉は〈思想〉性を特色とする作家ではなかったからである。

しかし、彼女は次第に「文学界」の同人たちと親しくなった。異常に親しく交わるようになった、といってもよい。たとえば、明治二十八年五月の日記『水の上につ記』に、たびたび孤蝶と秃木が彼女を訪ねたことが記してある。十日の項には、日暮れに兩人が同道して来たことを書き記して、

孤蝶子、例によりてをかしき事どもいひちらす。哲理を談じ、文學をあげつらうに、ほこ先つよし。夜はいつしか更て十時にも成ぬ。

その「哲理」と「文學」とは具体的にどんなものであったろうか。とにかく、それら二つが並べて記されているところから見て、当時二十七歳であったという孤蝶

は、文学青年らしく、ヨーロッパふうの借りものの文学・人生論を開陳したに相違なく、一葉は煙に巻かれていたのであろう。

わが身は無學無識にして、家に産なく、縁類の世にきこゆるもなし。はかなき女子の一身をさくけて、思ふ事を世になさんとするとともに、こゝろに限あり。智慧の極みしるべきのみ。

と、卑下した口吻が漏らされているが、修辭の誇張を考慮に入れて考えても、それが彼女の本音に近かったのではあるまいか。しかし、

此人々と我れ、もとかり初の友といふ名のもとに遊ぶ身也。うき世の契りに於ていと軽やかなる友の中也。

と、この友情を限定する冷たい現実感覚を、彼女は失っていない。一葉は孤蝶や秃木のいわばなまな気焰から感動を受けたおのれを、その局外に立て直そうとしていくようである。彼らの語る「文學」が具体的に学んできたにもせよ、それが直接彼女の創作につながったとは思われない。少なくとも、ここから、一葉と英文学のかわり合いを論証することはできない。

一葉の甥樋口悦氏が編集した『一葉に与へた手紙』に

は、孤蝶、秃木、秋骨などの手紙数十通が収録されているが、そのなかに、具体的に英文学の作品を、ことに、小説を論じたあとは、きわめて稀薄である。たとえば、明治二十八年十月十一日付けで孤蝶は長文の手紙を彼女に書いている。が、

友は大に笑ふて此れヂツケンスの筆にかゝりそうなる所なりといふ蓋しヂツケンスは今世紀英國小説壇の大家、善く英都ロンドンに於ける下層の生活を活寫せしが故なり、

と、『小説神髓』などにとっくの昔に述べてあるようなことの説明が行なわれている。とすれば、その数ヶ月前に、彼が「あげつらつた文學」とは、いかにも空漠たるものであったに相違ない。はじめにいったように、「たけくらべ」は明治二十八年の一月から翌年の一月にかけて「文学界」に掲載され、そのころ、一葉はすでに独自の文学を創造していたのであるが、英文学が——イギリスの小説が直接それに関与したとは、考えるわけにいかないものである。

が、それにしても、「文学界」同人たちは一葉をイギリスの小説家に連想したらしい。秃木の語るところによ

れば、

容姿に於ては、一言にして云へば、紫式部ではなく、清少納言に近いのであつた。我々仲間ではブロンテ、ブロンテとよく女史を呼んでゐるが、全くその通りであつて、決して綺麗な人ではなかつたのだ。⁽⁸⁾

ということであるから、その連想は容貌がひき起こしたのであろう。たしかに、ブロンテ姉妹は美貌でなかつた。秃木は長姉シャーロットを指しているのであろうが、彼女もけつして美人とはいえない。それは、彼女の弟ブランウエルの描いた有名な姉妹の群像を見ても、よくわかる通りである。

しかし、一葉とシャーロット・ブロンテとが似通っているのは、ただ容貌ばかりではない。秃木たちがどれだけの類似を意識してこの渾名をつけたのかわからないが、シャーロットの肖像にうかがわれる彼女の人となり、彼ら青年たちの鋭い感受性に訴えなかつたはずはない。げんに右に引用した文章の少し前に、秃木は桃水に献げた一葉の思慕を語って、

ブロンテ女史ともあらうものが平凡な田舎教師を戀して、それと結婚したやうに、何う見ても艶消しのやう

な気がしてならない。

といっている。一八四七年に『ジェイン・エア』を出版して、名声を博したシャーロットが、五四年に片田舎の父の牧師補ニコルズと結婚した事実が言及されているのであろう。が、それは、じつは、実社会における人間(女)としての彼女の良識を示す挿話なのであった。十九世紀のイギリスでは、あるいは、でも、評判のよい小説を一、二編書いただけで、安穩な社会生活を送るわけにいかなかったからである。

一葉の桃水にたいする関係はシャーロット・ブロンテのニコルズにたいするものとひとしいとはいえない。しかし、衣食の道につながる小説作法の師桃水から彼女が受けた重圧感、いいかえれば、ただ美しい可能性には満ちていても、自分の実生活とは無縁な孤蝶や秃木と違って、現実に人生を生きている——しかも、知的に生きている男桃水にたいして、彼女が女性らしい信頼感を抱いたとしても、当然であったといわなければならぬ。シャーロット・ブロンテはわびしい北英の寒村に育って、弟妹たちを背後にひかえながら、自身の才覚ひとつで世のなかへ出なければならなかった。しかも、恵まれ

た才能を浪費して死んだブランウエルの死後、責任は彼女ひとりの双肩にかかっていたのである。そのような事情は、ことに、最近、新しいブロンテ伝の考証によって詳細が明らかにされたのであるが、だいたい古くからわかっていた。古典的なブロンテ伝であるギャスケル夫人筆の伝記に、その幾分かが印象的に語られている。⁽⁹⁾

一葉もまた、一家の興隆はおろか、その存立さえも、自身の責任として担っていた。将来を嘱望された長兄泉太郎が明治二十年の末に死に、その二年あとには、失意の父則義が亡くなった。しかも、名人肌の陶工であった次兄虎之助は、実生活上、はなはだ当てにならなかつた。⁽¹⁰⁾ 秃木や孤蝶たちはそのような樋口家の事情を知っていたのであろう。とすれば、彼らが一葉をシャーロット・ブロンテにたぐえたのは、すこぶるうがった比較であった。

が、その比較が二人の女流作家の人間の類似にではなく、文学的類似にではなく、まして、相関・影響関係に基づくものではなかったことは、いうまでもない。

職業的小説家の代表者尾崎紅葉の作品を持ち出すこと

が、問題を解くひとつの鍵になりはしまいかと思われ
る。

紅葉の『不言不語』は明治二十八年一月から三月まで
「読売新聞」に連載された。『たけくらべ』が「文学界」
に掲げられたのと同じ時期に当たっている。紅葉の傑作
といわれる〈言文一致〉体の『多情多恨』に先立つ沈滯
期の作品とされているが、流麗な雅文を駆使した苦心の
作である。

内容的には、一種の怪奇小説(ミステリー)である。簡
単に筋をいえば、ある若い女が夫婦暮らしの淋しい家へ
小間使に雇われ、いわくありげな彼らの間柄にとまどう。
けっきょく、夫人が死んで、秘められた殺人事件が判明
する。その経緯に、客として逗留しに来た主人の弟と小
間使の恋がからみ、全体が彼女によって物語られること
になっている。

西鶴から強い影響を受けて来た紅葉は、この小説を書
くとき、『源氏物語』を座右においていたということだ
があるが、たしかに、その文体は西鶴と『源氏』をつま
まぜたような感じがする。次に、『不言不語』の冒頭を引
用し、それに並べて、『たけくらべ』の冒頭を掲げてみ

たい

一素封の奥方、田舎住の徒然を慰むる御敵手求めらる
るよし。其者齡十七より廿歳迄にて、素性賤からず、
容貌も醜からず、氣質は温良、普通は書讀み、物書き、
諸禮といふほどの事は無くとも、行儀正しく、琴、三
味線のいづれか習熟あるべし。月給は八圓なり。なほ
神妙に勤めなば、彼方の親類分にして、相應に支度さ
せて、良き方へ縁附かすべしとなり。環、行きて見ぬ
かと、叔父なる人の仰せられけり。

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に
燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなし
の車の行來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音
寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みた
る人の申き、三嶋神社の角をまがりてより是れぞと見
ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、
蔭ひはかつつ利かぬ處とて半さしたる兩戸の外に、
あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のあ
る田樂みるやう、裏にはりたる申のさまをかし、
この二つを比べて、大雑把にいえることは、『不言不

語』と『たけくらべ』が著しい形式上の類似を示し、それが判然と非ヨーロッパ的な文学伝統に則っているということであろう。

しかし、それら二作の内容は判然と違ふ。前者が風雅を旨としてはいても、しよせん、遊戯的な娯楽読物であるのたいして、後者ははっきり人間の内面を一種の危機意識において捕えた、生活自体の、厳しい、美しい描写である。近代的な自我の反省、人生のアイロニーやベロソスといったものが、みごとに盛りこまれているといつてよいであろう。

水仙の造花が美登利に贈られ、彼女は

何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに
入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳
へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへ
ぬべき當日なりしとぞ。

と結ばれる『たけくらべ』の結末を、秘められた殺人事件が明かされたことを述べて、

此事胸に浮ぶれば、忽ち奥様の怨しげなる御顔の顯は
るゝを奈何にせむ。然れば爰に筆を止めつ。又重ねて
は此事胸にも浮べまじきなり。

と手記を書き終えたことになっている『不言不語』の結末と比べれば、そのような両作の相違はおのずから明瞭であろう。

としてみれば、その相違は根本的にどこから生じたのであろうか。

『不言不語』には横文字の種本があったという。「國民之友」第二百四十六号に、公平庵(宮崎湖処子)がこの作品を批評して、

聞く是はかの「谷間の姫百合」の作者の作を翻かへし
たるものゝ由にて、余輩は先づ眼中萬卷の書を讀破し
たらん紅葉か、かゝる作者の手に成りしかゝる小説を
擇みたるを怪まざるを得ず。

と指摘して以来、その出典についてとかくの論議がな
くはなかつた。近ごろ、明治文学にたいして、(比較文
学)的研究方法が適用されるようになると、幾何かの新
しい考証も行なわれた。が、それがどんな小説かは不明
なようである。(12)そして、いつてみれば、それも当然なの
である。『谷間の姫百合』の初版および再版の「例言」に
よれば、同書はバーサ・M・クレリーの『ドロー・ソーン』
という小説の訳だということであるが、今日たいていの

文学辞典・書誌に名のあがっていない十九世紀後半の通俗作家(バーサ・M・クレール)は、完全に文学史から脱落して、その作品はほとんど霧散してしまった。たとえ、それをいくつか入手することができても、そのようなものを読み、あげつらうことは、よほど物好きな暇潰しに相違ない。

差し当たっての問題にとつて重要なことは、早く湖処子が指摘したように、当時英米で大流行をしていた(しかし、今日ほとんど痕跡もとどめず消え失せた)通俗小説に、紅葉が自作の想を求めたことである。別のいいかたをすれば、一葉は英米の通俗小説を翻案しようなどとはしなかつたということである。われわれは低級な通俗小説を一葉に押しつげなかつた「文学界」同人にたいして敬意を表すべきなのであろうか。それとも、そういう圧力を拒否した一葉にたいして表すべきなのであろうか。

いづれにしても、一葉は彼らから英文学的雰囲気を受取したに相違ないにもかかわらず、安易に追隨しなかつた。そして、それは、もとより、彼女の教養と資性のせいであつたらう。しかし、「文学界」同人たちの文学的良識——ではなかつたかもしれぬ。が、英文学によつ

て養われたその近代的感覚と誠意が、この偉大な女流作家に十分伝わり、彼女を彼女らしく育て上げた要因のひとつになつたのではないか、と思わないわけにいかない。

「文学界」第二十七号の「時文」欄に、「不言不語を讀む」という批評を書いて、

文字は非凡なれどなほ雕琢の跡あり。趣向は巧みに、物語りの順序は驚くべき程の出来なれど、われはなほ其製作に細工の跡あるを認む、

と記した雪丸(禿木)が、もし『たけくらべ』を客観的に、すなわち、非党派的に論評した、あるいは、することができたとしたら、なんといいたであらうか。

- (1) この葉書の原文は後述『一葉に與へた手紙』に収録されている。
- (2) 「めさまし草」まきの四。露伴、緑雨、鷗外の合評である。そのうち、どの部分が誰の筆になつたものかは確証できない。
- (3) 明治二十五年三月。一葉の文壇的処女作である。
- (4) 塩田良平『樋口一葉研究』第五章第三節一。
- (5) 筑摩書房刊一葉全集第七卷所収。
- (6) E. H. A. Scheerer, *Études critiques sur la littérature contemporaine*, I, V, VIII.

(11) 樋口一葉考

- (7) 矢野峰人『文学界と西洋文学』。
(8) 平田禿木『文学界前後』。「一葉の思ひ出」三。
(9) Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1862), Chaps. V, VII, IX, XVI etc. なお、この書物の第二十六章に、ニョルス師が真面目な、良心的な人物であり、シャーロットの作家的名声にひかれたのではないことが説かれてゐる。
(10) 塩田良平、前掲書第三章参照。
(11) 本間久雄、中央公論社版尾崎紅葉全集第五卷解題を参

- 照。
(12) 木村毅「バーサ・クレイと明治文学」(『島田謹二教授還暦記念論文集比較文学比較文化』所収)参照。
(13) 末松謙澄訳、明治二十一年出版。
(14) Bertha M. Clay, *Dora Thorne*. Bertha M. Clay は Charlotte Monica Braeme (1836—84) の他一群の作家が用いた筆名だといふ。

(一橋大学教授)